



Pチーム 政策案

Mission

教育格差を是正する政策を考案せよ。ただし、教育格差とはどのような問題か、教育格差が是正された状態とはいかなる状態か、明確にすること。




教育格差とは

教育格差とは、両親や身体的・精神的特性といった生まれた時点の条件によって子供たちが自身の努力では挽回不能な状態に置かれ、受けられる教育や学力、現実的に可能であるという意味での人生設計の面で生まれる決定的な差のこと。



なぜ教育格差は是正すべきか？

- ・潜在能力を發揮できない不正義
 - ・競争率の上昇により、専門職の質が上がる
 - ・貧困軽減による、生活保護受給世帯の減少
 - ・貧困の子ども減少による、社会的損失の減少→一学年の子どもにつき、税・社 会保 障負担額が1.1兆円増加(日本財団「子どもの貧困の社会的損失推計」レポートより)
 - ・子どもの逸脱行動の減少による治安の良化
- 

現状分析

①生まれた環境(出身階層)などによって

教育格差が生まれる

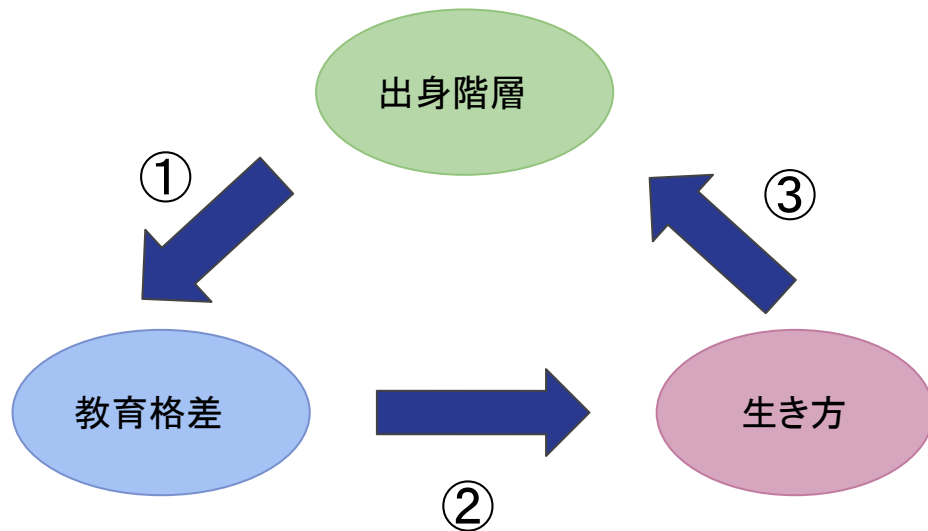
②受けた教育によって将来の選択肢が

結果として狭まってしまう

③親の生き方(職業等)が

子の出身階層を規定する

→循環構造により教育格差は固定化される



例) Mさんのライフストーリー

保育園のころ、父親の借金を理由に両親が離婚。児童相談所に通いつつ、小学校に登校していたが、授業に集中できず、絵を描くようになる。勉強にはまったく関心がなく、母親も家庭で勉強をうながすことはなかった。中学校、母親が病気で家事ができなくなり、いじめを受けた。割り算や正負の数がわからず、授業はちんぷんかんぷん。中1、2、の頃はゲームにハマリ、一日中やることもあった。中3になり、初めて三者面談で進路を話す。家では勉強より、家事をやって、と母親に言われた。とりあえず、地元の商業高校を受けたが不合格。最終的に夜間学校に進むことになった。

果たして経済支援だけで解決するのだろうか？



出身階層→教育格差

- 高SES層(出身階層が高い)ほど高学力の傾向

- 高SES層の保護者ほど、子どもの教育に関心を払う

- ・子どもに高い学歴を期待する保護者の子ども

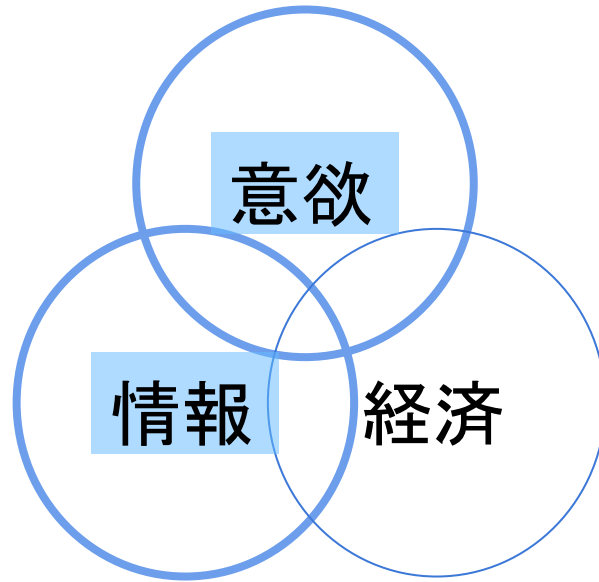
- ・学校の教育目標やその達成に向けた方策を知っている保護者の子ども

など、親が子どもの教育に関心を払っている子どもは学力が高い傾向

- 低SES層の子供ほど、ロールモデルがなく将来が見えていない

低SES層でも、親が関心を向け、子供が将来像を持てば克服可能！

問題領域



- ・経済面で支援策があっても、本人に情報・意欲がなければ届かない
- ・「経済面」とは異なり、「本人の努力の問題」「自己責任」
とされ、情報・意欲格差にはあまり目が向けられてこなかった

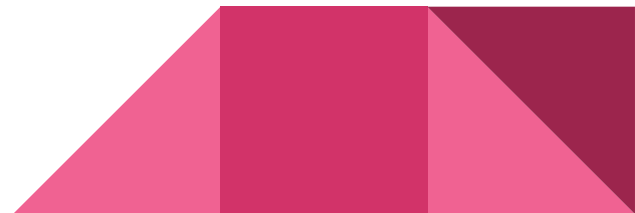
理想状態（義務教育終了段階において）

①意欲：選択肢を選ぶための障壁が最小限になる

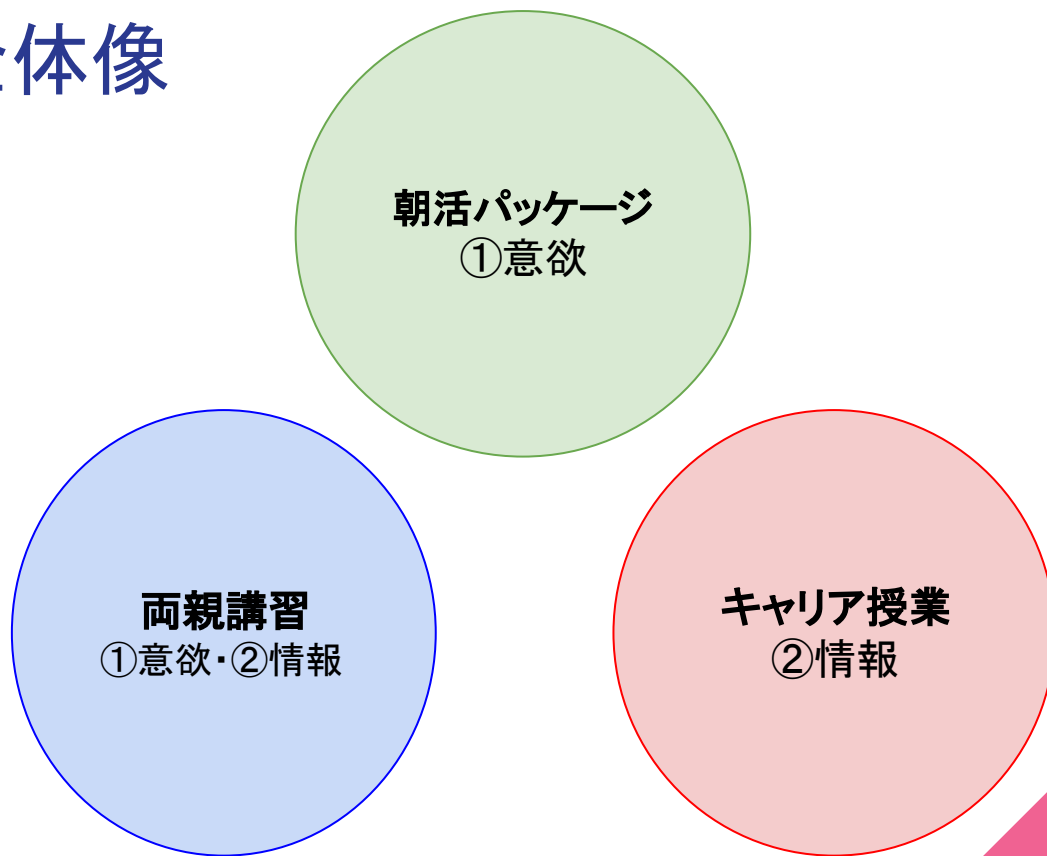
- 選んだ選択肢について実現可能だと思えること
- 選んだ選択肢に向かって努力できる環境・意識があること

②情報：実現できる人生の選択肢を増やす

- 人生設計の選択肢を知る機会が保障されていること



政策の全体像



「意欲格差」を改善するには

①自己肯定感・自己効力感

動機付けになる・現代を生きる当事者として

②基本的な生活習慣の確立

生活の基盤が整うことが先決、不規則な生活態度は学習意欲・能力の低下につながる

→立て直して学習習慣へつなげる



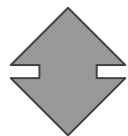
①自己肯定感・自己効力感

自己肯定感
自己効力感が高い

「自分はやればできる」
「自分はコツコツと頑張れるし、
頑張ったらいろんなことを成し遂げられる」



学習意欲
上昇!!!



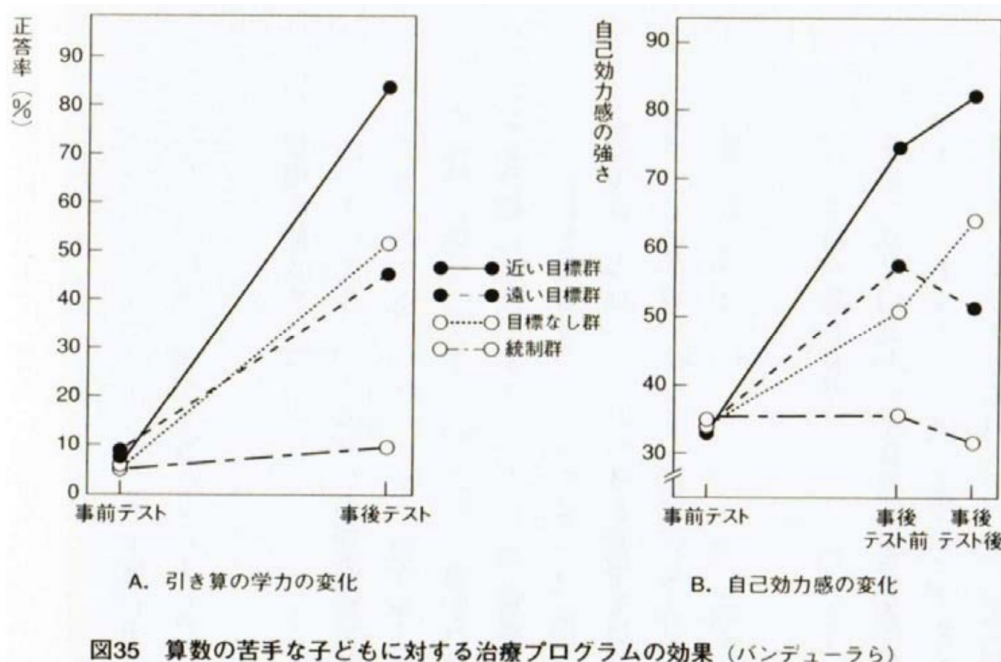
自己肯定感
自己効力感が低い

「自分は何をやってもダメ」「私は
勉強ができない」

学習意欲
低下...



自己肯定感・自己効力感

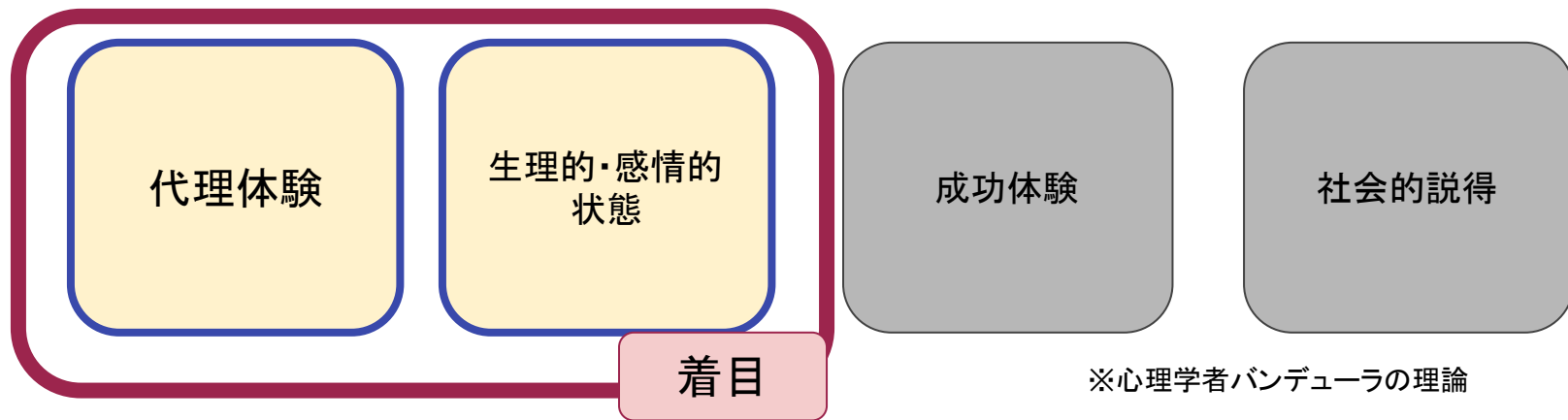


諸外国に比べ、日本の若者は自己を肯定的に捉えている人が少ない

←自己効力感が上がると学力(成績)も変わる!!!

生活習慣を立て直すことで、自己肯定感・自己効力感が上がるという研究がある

自己肯定感・自己効力感を高めるには.....

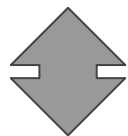


- ・代理経験とは
自分と似た他人が成功している様子を見る・知ること
- ・生理的・感情的状態とは
精神的・身体的状態が良好に保たれていること

② 基本的な生活習慣の確立

生活が安定しない
学校になじめない

「就寝時刻が遅い」「遅刻しそう
で朝食抜き」



生活習慣が安定
学校に適応

「勉強するときに集中できる」「学校の時間
割に適応できる」



生活習慣と貧困

小6

| | 全世帯 | 非貧困世帯 | 貧困世帯 | ふたり親世帯 | 母子世帯 | 父子世帯 | 親不在世帯 |
|------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 朝食を毎日食べている(%) | | | | | | | |
| している | 90.4 (0.3) | 91.3 (0.4) | 83.8 (1.1) | 91.6 (0.3) | 83.0 (1.1) | 87.7 (2.2) | 75.0 (9.4) |
| どちらかといえばしている | 6.4 (0.3) | 5.9 (0.3) | 9.9 (0.9) | 5.7 (0.3) | 10.4 (0.9) | 8.7 (1.9) | 16.5 (8.4) |
| あまりしていない／全くしていない | 3.2 (0.2) | 2.8 (0.2) | 6.3 (0.8) | 2.7 (0.2) | 6.6 (0.7) | 3.5 (1.2) | 8.5 (5.9) |

- ・貧困世帯の欠食率はおよそ一般世帯に対して 1.8倍
- ・就寝時刻、起床時刻も不規則でおそくなりがち
- ・学習を進めるには、基本的な生活習慣確立が大前提！

2017, 『子供の貧困に関する新たな指標の開発に向けた調査研究 報告書』内閣府

朝活パッケージ

現行：早寝早起きや朝食をとるなど、子どもの基本的な生活習慣を育成するための全国的な普及啓発活動の推進（文部科学省）

平成28年度時点で朝食摂取率 83%

2歳児の35%が夜10時以降就寝

啓発が届かない層に朝食を食べてほしい！！

・就学前の食事提供

- ・対象：就学前の子ども
- ・実施主体：自治体
- ・栄養管理士監修の食事
- ・費用負担：国
- ・無料配達
- ・アレルギー配慮
- ・民間に委託（1食あたり220円）

・小学校での朝食提供

- ・平日朝7:30頃～
- ・場所：小学校
- ・対象：小学生（希望制）
- ・実施主体：市町村（費用負担 国：1/2 自治体：1/2）
- ・地域の高齢者等を活用
- ・パンやヨーグルト等（1食50円※実費は）
- ・2週間前に献立表 & 希望日に○つけ提出
- ・長期休暇にも希望の家庭には学校で提供



生活習慣改善
→自己肯定感上昇

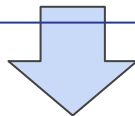
虐待の早期発見

孤食の解消

キャリア教育

従来のキャリア教育

「総合」の時間内で各学校が配分を決めて取り組む。進路指導に偏ったり、先生の裁量に任せられる部分が多く、地域間格差も



キャリア授業

「総合」70コマ/年のうち、35コマをキャリア教育に。具体的なプランニングや職場体験を行う。→小4～中2のキャリア教育

「情報格差」を改善するためには

① 支援の届かない養育者

教育への興味・関心が薄い + 支援の存在を知らない、自分が対象だとわからない



出生前の両親講習を実施

② 将来の見えない子どもたち

将来への視野が狭く、多様な職業を知らない、将来に向けた頑張り方・目標がわからない



小学校からのキャリア教育を拡充

両親講習と現行政策との連携

両親講習

出産前の家庭に対して、従来の両親学級の内容に加え、幼児教育・支援制度などの情報提供を行う

乳児家庭全戸訪問事業

原則4か月を迎えるまでの乳児のいる全家庭を訪問し、子育てに関する相談や情報提供を行う

養育支援訪問事業

適切な養育を確保するため、乳児家庭全戸訪問の結果とその他保険医療機関からの情報提供から養育支援が必要な家庭に訪問する

両親講習未受講の家庭も養育支援訪問事業の対象家庭とする。

両親講習

現行：両親学級

- ・各自治体・医療機関が実施
- ・妊娠中に受講
- ・助産師や保健師
- ・内容：妊娠中の母親の体調や、出産・出産後の赤ちゃんのお世話などについて
- ・多くの場合1回

東京都で参加率
約5割



両親講習

- ・各自治体・医療機関が実施
- ・妊娠中に受講
- ・助産師・保健師 + 民間(教育サービス会社等)に教育分野委託
- ・回数:分割複数回
- ・内容:従来の内容 +支援制度について +幼児教育、中長期的な子どもの教育について
- ・規定回数参加で育児セット贈呈 →参加率100%を目指す

参考：フィンランドのネウボラ制度

発達段階に合わせた5年間のキャリア授業

小学校中～高学年

将来の仕事や生き方の夢・希望をふくらませる

自身の生活と職業との関わりを考える

→自分が興味のある分野以外にも将来には多くの選択肢があることを知り、ロールモデルを獲得しにくい現代においても情報収集により将来

中学生

職場訪問でリアルな現場を体験する

様々な職業について、必要な情報を得る

→具体的なライフスタイルの設計、個々の興味にあわせた職場訪問

キャリアデータベース

現状の問題点.....子どもたちが持つ職業の知識に偏りがある、職業に就くまでの進路の具体的なイメージが湧かない(抽象的な情報に偏っている)

職業データベース制度..... ICTを活用し、キャリアプランを蓄積。職業に必要な資格・学歴、具体的な収入や人生設計を可視化

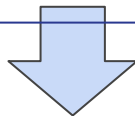


- ・子どもたちが自分の将来を主体的、計画的に考えることができる
- ・様々な職種について調べ、社会を広く知ることができる

興味に合わせた職場訪問

従来の職場訪問

社会科単元で学校別を実施。地域の工場、地場産業が中心で、地域格差を伴う。



新たな職場訪問

キャリア教育の一環として、個々の生徒の興味に合わせ実施。インターネットを活用し、大学や専門学校への訪問も盛り込む。将来像の可視化をねらう。

・学校別→地域別



参考文献

鹿毛雅治編, 2006, 『朝倉心理学講座8 教育心理学』朝倉書店.

松岡亮二, 2019, 『教育格差-階層・地域・学歴』ちくま新書

2019, 『ユースフル労働統計2019』労働政策研究・研修機構.

2014, 『平成25年度全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究』お茶の水大学.

2017, 『子供の貧困に関する新たな指標の開発に向けた調査研究報告書』内閣府.

2017, 『自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓ひらく子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上(第十次提言)』教育再生実行会議.

「子どもの朝食、学校で地域で ボランティアがサポート」『朝日新聞GITAL』2019年2月21日 <https://www.asahi.com/articles/ASM273HCXM27PTFC009.html> (2020年9月3日閲覧)

白井利明, 2001, 『白井図解よくわかる学級づくりの心理学』学事出版.